令和４年度別府市人権教育学級第４回学習会

日　時　：令和４年　９月８日（木）１０：００～１１：３０
場　所　：別府市役所　５Ｆ　大会議室
テーマ　：高齢者と人権

日常にある人権侵害

講　師　：大分県人権問題講師団講師
井上　杉夫　さん

講演概要

自己紹介

・約１０年前に県南落語組合会長の矢野大和さんに弟子入りし、大分県警察を２年前に退職後、安心・安全を笑いにのせてお届けする口演家として活動開始。

＜講師の井上　杉夫さん＞

１　はじめに

〇口演家になったわけ
・矢野大和さんや綾小路きみまろさんのようにお話できたら面白いだろうな、楽しく聞いてもらえるのではないかと思った。
・法被は、矢野大和一門のトレードマークだが、自分で作った。背中の似顔絵も自分で描いた。
・今日は、高齢者の人権の話をするが、自分に置き換えて話を聞いて頂きたい。

２　日常にある人権侵害

（１）人権侵害は、誰でも侵害される側にも侵害する側にもなり得る

〇例えば、介護で考えると、今は介護する側でも事故を起こして体が思うように動かなくなり介護される立場になるかもしれない。介護する・される、どちらの立場にもなり得る。しかし、ほとんどの人は、自分の立場が変わることなく、人権侵害することはないと思っている。自分は、特殊詐欺の被害にあうことはない、ブレーキとアクセルを踏み間違うこともない、と思っているのと同じである。
〇お金を騙し取られた人も自分が騙されるとは思っていないし、道路を迷走して事故を起こした人も自分はそんな事故を起こすとは思っていない。
〇家庭の中でも人権侵害はある。例えば、夫婦での日常会話の中で。

（２）老老介護

○家庭や施設で起きた介護する側が介護される側に起こした人権侵害事案・事件
・別府市で起きた介護疲れによる事件
・高齢者施設で起きた介護職員による入居者への殴打事件
こういう事案・事件は結構多く見られる。

老老介護３つのポイント

①夫婦の関係　②親子の関係　③世間（地域・社会）との関係

①夫婦の関係

○自分の両親の夫婦喧嘩、大事に至らずに済んだが、よくよく考えてみると、仕事や家事に追われていた母親の息抜きや楽しみはどこにあったのかと、今になって思う。老老介護において大切な夫婦関係は、夫の言葉や態度を妻がどういうふうに感じ取るかということだと思う。

○父親が料理をすると家庭は円満になる。自分は、８年間の単身赴任生活でひと通りの家事はできるようになった。退職した今は、晩ご飯を作り、車のナンバーは、妻の誕生日の数字にしている。それだけ、妻が大切だということを行動で表すようにしている。

②親子の関係

○私がある警備隊に勤務している頃、母親は大きな交通事故に遭っていた。ところが、母親は子どもに心配をかけまいとして事故のことは自分に知らせて来なかった。のちに大分に戻って実家に帰った時、母親に事故の後遺症が残っているのが分かり初めて事故のことを知った。その時、自分は生まれて初めて母親を怒鳴りつけた。「心配かけたくなかったとは何事だ。親兄弟に心配かけんで誰にかけるんか。」と。どんなに年をとっても親は子どもに迷惑をかけたくないと思うもの。そのくせ、親は子どもがいくつになっても心配でたまらない。

○未だに特殊詐欺の被害が無くならないのも同じ理由がある。ある日突然、子どもから電話がかかってきて、「父ちゃん、母ちゃん、大変なことになった。」と言われると、声が違うとか話がおかしいとかまったく考えずに行動してしまう。それは、子どものことを心配する親心にスイッチが入るからであろう。

○皆さん、自分の親に言ってあげてほしい。「どうぞ、心配かけてください。親の悩みを子どもに打ち明けてください。」と。悩みを打ち明けることが即解決につながらなくても、聞いてもらえただけで救われる部分はある。

③世間（地域・社会）との関係

○日本には、恥の文化がある。年齢が高くなるほどそういう考えを持っている人が多い。「人さまには迷惑をかけられない」と考えることである。
それは、それで素晴らしいことではあるが・・・。
　介護をめぐる環境は、大きく変わった。年金問題を考えても昔は高齢者を支えるためにたくさんの若者がいた。親が年をとれば家族や親戚、また地域の人が面倒を見てくれることで十分対応ができていた。ところが今は、地域は高齢者ばかりで連帯感も希薄になった。「人に迷惑はかけられない」とい

うことで肉親を手にかけるという悲しい事件も発生している。

○名古屋で実際に起こった事件・・２０代の息子はコロナの影響で失業。だんだんとうつ状態に入ってしまった。そして、病気の母親から頼まれて母親に手をかけてしまった。息子は、失業保険のことも生活保護のことも知らなかったというが、うつ状態で冷静に考えられなかったのではないかと思う。皆さんが自分ではどうしようもないことで困った時は、行政を訪ねてほしい。市役所には対応のためのいろいろな課がある。まずは、民生委員・児童委員さんや自治委員さんなど、近くの人に相談してほしい。警察も行政機関の一つ、何かあったら相談してほしい。

警察官時代の話

○ある時、交番の若い制服警察官が一人暮らしのおばあさんを訪問した。息子は、関東の方に住んでいるという。訪問が終わって警察から息子さんにはがきを書いた。「お母さん、元気にしておられますよ。特殊詐欺に遭わないようにお話をさせていただきました。」と。２週間ぐらいたった時にその息子さんより電話があり、「親のことは気になっていました。他人の方がここまで親のことを心配してくれるのですから自分も会いに帰ります。」息子さんは、それから１か月後ぐらいに帰ってきた。そのあとは、年２回ぐらい関東から帰ってくるという。

○行政は、皆さんのためにある。行政に頼ることは、迷惑をかけることではなく、人が人としての絆を大切にすることにつながる。誰もが介護する側介護される側になる可能性がある。即ち、誰もが人権侵害をする側にもされる側にもなりうるということ。自分だけでストレスや悩みを抱え込まず、行政を含めた周りの人たちに弱音を吐くと良いと思う。そして、そのことを周りの人にも伝えてほしい。

高齢者への接し方

○私の母親は、早くに夫を亡くし苦労しながら自分たち子どもを育ててくれた。その母親が、加齢からくる足の痛みのため、治療とリハビリを兼ねて私の自宅で３か月間一緒に暮すことになった。長年、人に頼らず頑張ってきた母親は、「ずっと私はこれで頑張ってきた」という強い思いをもっている。「昔ながらのやり方を変えた方がいいのでは？」と言うと、とたんに機嫌が悪くなる。

　母親の誕生日のある時、母親は、薬の飲み方を勘違いし、かなり飲み残しをしていた。飲み残しを防ぐためにも「こうした方がいいよ。」と言うと機嫌が悪くなり、部屋に閉じこもってしまった。長い間一人暮らしに慣れていた母親は、人から何か言われることに慣れていなかった。せっかく用意した誕生日の料理やプレゼントは渡すことができなかった。私は、そのことがショックで自分自身が許せずに、また、母親にどう接していいか分からずに２日間旅に出た。そして、母親の人生を振り返ってみた。人に頼らず、笑顔を絶やさず、畑仕事に精を出す母親の言葉を思い出した。「人には先にようしちょきよ」という言葉だ。

　そして、自分の頭に浮かんできたのは、「たとえ、私の言い分が世間的には正論でもそれが母親が長年の生活で見つけた生き方・考え方と違えば、それ

は、私の自己満足の押し付けではないか。人が生きていく中で大切なのは、生きた長さではなく、生き方の質なのかもしれない。あまり責任を感じ過ぎず、考え過ぎず、重く考えず、なるようになった時ぐらいの対応がちょうどいいのではないか。」ということだった。母親は、痛みが和らいだということで、また、一人暮らしにもどって畑仕事に汗を流している。

（３）子どもの人権侵害

○１０年ぐらい前の話である。バイクショップの人たちと自転車の防犯診断パトロールをしていると、鍵をかけずに放置されている新しい自転車を見つけた。バイクショップのご主人が「これは、昨日ばあちゃんが孫にこうちゃった自転車や」と悲しそうに言った。それを聞いて私は「ばあちゃんは、どんな気持ちでこの自転車を買って、何といって渡したのだろうか。」と思った。また、同じようなことが別の交番勤務の時にもあった。自転車を盗まれたと被害届を出しに来た中学生がいたが、その子の自転車は、２年間に４台も盗まれいずれも鍵をかけていなかったそうである。親は、自転車を買ってあげることはしたけれど、自転車を大切にすることやお金をかせぐ苦労は教えてなかったのではないか。

　うちの家でも子どもが３歳くらいの時に、実家に帰り、その時祖母が孫に５千円もの小遣いを渡したということがあった。その時私は、母親に電話した。「ばあちゃん、子どもはお手伝いできた時に１００円もらえば十分に満足するんよ。喜ぶんよ。えらいねえって言って渡すと。それが、中学生になったころには一万円もらってもお小遣いが足りんという。そういうふうに子どもの金銭感覚をマヒさせるのは身近な大人じゃねえかなあ。」と。子育てやしつけというのはやっぱり私たち大人の責任だと思う。

○社会を震撼とさせた中学生の通り魔事件があったが、二度とそういう事件を起こさせないためにも我々が本当に知らなければならないのは、そうした事件を起こした子どもたちがどんな環境で育ってきたか、どんな思いで育ってきたかということである。人が人として生まれてきた時、人としての情や絆を感じ合えるように、また、生きることの大切さを教えていくのは親の務めであると考える。子どもたちは、どの子も夢を叶えられる、どの子も幸せになってどの子も人の役に立てる、その可能性を等しく持っているのだから。

○子どもの大きな人権問題にいじめの問題がある。子どもが学校から帰って、いじめられていると親に相談した時、親としてきちんと話は聞けているだろうか。日頃からコミュニケーションはとれているだろうか。

　子どもがいじめで苦しい思いをしている時、親やおじいちゃん、おばあちゃんは、目の前にいる子どもや孫がどれほど大切か、命がどれほど大切かを目を見て話してほしい。そして、苦しみや悲しみに寄り添い、いっしょに乗り越えていく気持ちを伝えてほしい。そこから感じられる肉親の情、家族の絆から生まれる本当の笑顔と安心感というものを家庭で築いていただきたい。

<講師の話を熱心に聴く受講者の皆さん>

３　終わりに・・・夢と希望につながる話２題

（１）フェイスブックを通して知り合った女性Ａさんとの交流で思うこと

　Ａさんは、人口呼吸器がはなせず体が不自由だが、わずかに動く指でパソコンを打って話をしたり絵を描いたりしている。そして、絵の個展を開いたりしている。そんなＡさんは、俳優の鈴木亮平さんの大ファン。そこで、Ａさんをハンセン病がテーマの鈴木亮平さん主演の映画に誘った。人権は難しく考えられがちだが私は、「誰でも普通に同じ場所にいられること」だと思っている。そして、「理屈で人権を分かっているような気になっても何も始まらない」とも思っている。そんな思いもあり、Ａさんを映画に誘った。会場の協力をいただきその映画を見終わった時にＡさんの母親が、映画が見られたこと以上に外出できて楽しめたことを喜んでくださった。一人では外出することができないＡさんの次の夢は、鈴木亮平さんに会うこと。Ａさんの夢が私の夢でもある。私は、Ａさんに言った。「夢は、叶えたいと思う人だけが叶えられるんで。」と。

（２）アメリカ大リーガーの大谷翔平選手のことから思うこと

　皆さんの子どもが大谷翔平さんのように二刀流になりたいと言ったらどう答えるだろうか。「いいなあ、頑張ってみよ。」という人が２割いたらすごい。「寝言は、寝てから」という人が２割から３割、残りの半分ぐらいは、どう反応してよいか迷ってしまうだろう。なぜ、そういう反応になるのか。それは、二刀流になって活躍したいと思ったことがないから、どうやったら二刀流になれるのか考えたことがないからである。今は、たくさんの情報がＳＮＳにＵＰされており、本当になりたいと思って真剣に調べたら可能性は０ではない。その夢を叶えた人の本を読んだりその人の話をたくさん聞いたりして夢を叶えるための方法を知れば良い。夢だけではなく日常にも悩みや辛さはたくさんある。そんな時のヒントも必ず本の中にある。そうして本から学ぶ親の姿を見て、子どももまた本から学べるようになる。

　私たちが生きていられる時間は長いのか短いのか分からないが、可能性に挑戦しないというのはもったいない。家族一緒に子どもの夢をそして、皆さん自身の夢を叶えていただきたい

これからも、皆さんが人権を大切にしながら、夢と希望をもって頑張っていただけるよう私も口演家として頑張っていきたい。